入学前準備教育

実施の総括（英数国）

実作例

事務局より（震災対応報告等）

講師紹介

上嶋　康道　（基礎英語）

聖学院大学　政治経済学部　コミュニティ政策学科非常勤講師
入学前準備教育で、長く基礎英語を担当。埼玉県内の中高一貫校でも英語を担当している。予備校では 20 年の英語指導経験がある。都内複数私立高校での国語特別授業や、高等学校国語教科書の指導書（筑摩書房）の執筆経験もあり。

岡田　安司　（基礎数学完成）

京都府出身。一橋大学法学部卒。大学受験予備校講師として数学・現代文・古文などをマルチに教える経歴を持つ。大人数の授業はもとより、一人ひとりの学力レベルに合わせた面倒見のよい指導で人気がある。

大槻　岳　（文系国語表現力基礎）

聖学院大学　政治経済学部　コミュニティ政策学科非常勤講師
日本リメディアル教育会会員。社団法人全国学力研究会評議員。ティーオー（株）代表取締役。大手予備校ではセンター・国公立難関私大の模試作成や解答速報も担当。入試問題を出題者・採点者の「眼」から切り出す鋭い解説に加え、テンポと間を重視したメリハリのある授業内容は多くの生徒から絶大な支持を得ている。
また、首都圏各高等学校を中心に、大学進学講演・小論文講演・教員対象研修を年間 50 回以上行っている。
受講生は高校生だけにとどまらず、非常勤講師として大学でも論文講座を持つと同時に、オープンキャンパスの講師を始め、入学前準備教育などの依頼も多く、春期には複数の大学で文章力講座を実施。特に、聖学院大学での入学前準備教育は、担当講師として朝日新聞や読売新聞の紙面を飾るなど注目度は高い。

1. 基礎英語

基礎英語担当　上嶋康道

《はじめに》

本年の入学前準備教育 3 月講座は、3 月 11 日の大地震によって後半の授業を中止せざるを得なくなってしまいました。大きな余震が頻発していた状況下、受講者の安全を考えると正しい措置であったとはいえ、貴重な機会を唐突に奪われてしまった参加者にとって、残念な結果でした。2 月講座については授業をすべて実施いたしましたが、授業開始が 5 月になったことで準備教育との間隔がさらに広がる結果となりました。ただ、このギャップの問題自体は本年に限ったことではなく、特に 2 月講座では例年問題になることです。この問題の対策として本年は自習課題（英語で日記を書いてみる）を参加者に与え、それを提出するように促しました。開講当初からおこなうことを意識づけしていたわけではなかったので提出率はあまりよくありませんでした（十数パーセントの見込み）が、これをきっかけとして来年度はさらなる改良を加える予定です。

《基礎英語の目標について》

2011 年英語の授業は、これまでの受講者の様子・要望をふまえ、基礎知識の確認の意味合いをより強くしました。もちろん、「英語嫌い解消のきっかけづくり」が大目標であることは変わりありません。

受講者は、大学受験という、英語学習での大きなモチベーションとなっている関門をすでに終えています。彼らに必要なことは、ペーパーテストの点数を取るための学習を脱却し、英語学習に向かう新たな動機を見つけることです。この講座はその手伝いあるいはきっかけを提供することを目指すものです。ただし、英語が好きな受講生も、もちろん、それなりの数がいますから、彼らにはいっそう英語を好きになってもらうことも視野に入れています。

《内容について》

点数を取るための学習からの脱却というこの目標のために、多様な英語とのふれあい、とくに音声面での英語体験を重視しています。ことばを学ぶのに音はきわめて重要な要素です。しかし、とくに高等学校ではその点はなかなか手が回っていないのが現状です。本稿の執筆者も、塾・予備校や高等学校で英語（チームティーチングで英会話も）を教えており、そのあたりの事情はよくわかります。単位の認定を伴う正規の授業で教えようとする場合、試験による定着度の確認が必要になります。ところが、音声学習と試験は相性がよくありません。準備教育の基礎英語では単位が認定されませんが、だからこそ、通常ではスキップされがちな部分を丁寧に指導できるというメリットが生まれています。英語習熟度のばらつきが大きい読解より、音声面の授業のほうが好都合という事情もあります。さらに、文法・読解の英語が不得意な受講者が発音聞き取りでは短期間でめざましい向上を示すことが珍しくないのです。

以上のような背景で、例年より発音と聴き取りのポイントを明確に理解してもらうことに成功しました。2010 年からはフォニックスの要素も取り入れています。どうやら思っていた以上に基礎的なところまで戻って話をする方が有効なようです。綴りと実際の音声とのずれについては今

年も力を入れました。受講者の反応も良好でした。

これから大学生になるに当たって必要な知識というものは存在します。第 1 講で、名詞・動詞・形容詞について、それぞれの役割を説明しました。語順が重要であること、動詞については語法に注目にすることの意義も強調しました。

2008 年の 3 月講座から、絵本やごく薄い英語の本を用いた読書の時間を導入しましたが、授業時間の関係で本年度は実施しませんでした。

例年『不思議の国のアリス』の話をしているのですが、昨年ティム・バートン監督の映画が公開されたことで、いつも以上に熱心に話を聞く受講生が多かったようです。

《受講生の印象》

英語が不得意であっても前向きに取り組む参加者が多く、非常に良好な雰囲気でした。特に今年力を入れた発音訓練では熱心で担当者としても喜びを感じました。

《来年度に向けて》

自ら学ぶ習慣作りという観点から、テキストに自習できる要素を増やしたいです。最初に述べたとおり、特に 2 月講座については、講座に参加してから 4 月の授業開始まで相当な日数があいてしまいます。今年は、新学期の授業開始までの次週課題について、受講者に説明することができませんでした。ただ、反応は悪くありませんでしたから、来年度はさらに発展させた形で反映させることを希望しています。

2. 基礎数学完成

基礎数学完成担当　岡田安司

⑴授業の進め方について

例年、全く授業に参加出来ず寝ている学生がいつも 1〜2 名いました。せっかくの事前教育なのに、何とか力になれないものか…とずっと残念に思っていました。そこで今年は 2 つの方向転換を試みることにしました。

一つは進度を思い切り遅くしたことです。各単元の基本原理を説明する際、言葉の説明を丁寧にし、具体例を入れて必ず黒板に残すことにしたのです。黒板に残せば、写したり理解に時間がかかる人でも大丈夫です。

私は、4 色くらいのカラーチョークを用いて丁寧に図を書き、数字を書き込んで視覚的に解りやすく表現をするよう心がけました。

二つ目は、問題が解けない場合、先に解けた人が積極的に教えてあげるよう勧めたことです。初めて出会った人同士でも、助け合うことこそ「学ぶ」ことだと説くようにしたのです。

私が説明するより、友達から説明された方がお互いの勉強にもなり、互いに切磋琢磨出来るのではないかと考えたのです。

例年だと、早く解けてしまった人はどんどん先の問題を解いて行き、解けない人は置いてきぼりを食らうことになりました。これだと、数学が苦手な人はずっと苦手なままで、一人静かに「寝てる」しかなくなってしまうのです。これでは大学に来て事前「学習」してないことになります。

⑵学生の反応

結果は上々でした。学生のノートを見て回っていると、カラフルな黒板を見て、丁寧にカラフルなノートを作っています。数学の勉強の筈が、人によっては塗り絵の時間になっていたかもしれません。

しかし、綺麗な図を書くうちに自分で考えるようになってきました。一人ぼっちで寝る人はいなくなり、隣の人にここはどうなるのと聞いています。聞かれた人が解らない時は、後ろの人や隣の列の人に聞いています。早々と解いてしまっても、近くの人に教えています。

教室全体は例年より騒がしい状態になりましたが、決して遊んでいるわけではなく、授業に「参加」出来るようになってきました。

進むのは遅くても、一人一人が自分の力で、解らない時は教えあって助け合うようになって来たのです。

そして最終日。高校の制服を着る最後の日ということで、皆が自分の高校の制服で登校してきました。首都圏の色々の制服が集まって実に面白い光景です。私は思わず記念撮影をと提案。和気あいあいとした雰囲気で授業を終えました。

(3)震災を経験して

2 月の講座は無事終えましたが、3 月は途中で震災が起こり中止となりました。

震災当日の 3 月 11 日は、帰宅出来なかった学生が大学に泊まることになってしまいました。午後 5 時過ぎから食堂に集まり、家族に連絡を取れないまま深夜を迎えます。外の気温はどんどん下がり、今後どうなるか不安な夜が来ました。

しかし、そんな不安な中でも皆が励まし合い慰めあっています。初めて顔を合わせた人でもアドレスを交換して、友達の輪が自然に広がって行きました。

起こった災難は不幸な事でしたが、停電や食糧不足のなかで、一人一人が我慢をし、助け合って生きて行くことを身をもって知る機会を得ました。その意味では、授業の中止も活きた教材に変わり、学ぶ事がむしろ増えたのではないでしょうか。

来年はこの教訓を踏まえ、机上の知識だけにとどまらない、助け合う事前「教育」へと前進出来るよう、工夫を重ねたいと思います。

3. 文系国語表現力基礎

文系国語表現力基礎講座担当　大槻　岳

１）担当教科の実施概要・狙い・授業展開方法など

主に推薦入試での合格者を対象とする 2 月講座、主に一般入試での合格者を対象とする 3 月講座の両方において、担当講師作成による同一のカリキュラムで講座を設置した。ただし、3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響で、3 月講座は第 6 講以降が休講となったため、代替レポート課題を実施した。

第一講「思考力のトレーニング」
第二講「小論文の型１　原因追求型」
第三講「小論文の型２　功罪指摘型」
第四講「小論文の型３　要約」
第五講「社会問題を考える」
第六講「大学に入って学びたいこと」
第七講「平等と優先順位を考える」
第八講「他人の作品に意見を言おう」
代替レポート課題　「共感力・行動力ワークシート」
「これまでの自分、これからの自分、大学で学びたいこと」

・講座運営概要（昨年度からの変更点を踏まえて）

各回は大学の講義に合わせ、90 分授業で行った。冒頭の約 20 分から 30 分を使用して講師が受講生全員に対して本日の課題の趣旨を説明し、残りの時間で受講生は文章に取り組む。授業中にわからないところは講師に質問しアドバイスを受け、また早く書きあがった生徒は授業内に提出して講師のアドバイスを受ける。授業終了時に書きあがった答案は講師に提出し、添削スタッフがその答案の添削を行って次回授業時に返却するというシステムである。

昨年度と比較すると、講座内で課題を書き上げることに注力せず、書く前にメモを取り、構成を組み立てながら書き、そして書き上げた後は自分で答案を見直して修正を施してから提出するように促した（その際、「校正」のような形で余白に書き込むことを推奨した）。今回の課題は手書きであるが、大学で取り組むレポートが容易に修正できるパソコン入力であることが多いため、このような形式を取った。

基本的にはこのような形式で講義を行ったが、第七講課題だけは「発表形式」とした。クラスの人数に応じて 5、6 人程度のグループを作り、与えられた課題についてグループ内で議論をして意見をまとめ、代表者がクラスの前で発表した内容に対して、他のグループ、もしくは講師から質問を出して討論を進めた。大学現場におけるサブゼミのような形式である。第七講課題が比較的取り組みやすい内容でもあり、生徒には授業当日に告知していきなり行ったにもかかわらず、他グループへの質問の有無、その指摘の鋭さに関しては個人差があるものの、全グループが与えられた課題についてしっかりと議論し、そして発表まで行った。

先述したように、いきなり書き始めるのではなく、まずはメモを取ることを意識づけるために、初回の講義では「思考力のトレーニング」として、ワークシートに取り組むという課題を実施した。内容はこれまで同様、「価値観」というキーワードで結ばれる複数の課題を行い、「視野」を広げることの大切さを訴えた。詳しくは後述する「受講生の印象」にて述べるが、昨今の受講生を指導していて感じた印象を踏まえた内容である。講師はこのような「視野」の広さがそのまま、大学、引いては社会で必要とされる「客観性」の土台になると考えている。

「小論文」として行った課題は、マナー違反、ニート、情報化社会、小学校の英語教育必修化、若者に必要な能力、日本人とペット等、現代社会の様々な諸問題を課題とし、さらに受講生が自らそれらの課題を選択する形にすることによって、受講生に自主性を意識させるように心がけると同時に、自分が選んだ課題に対する責任も考えさせるようにすることで、課題未提出とならないように最大限の配慮をした。昨年同様、選択課題の割合も増やし、生徒に「選択」意識を持たせるように心がけた（第二回、第三回、第四回課題）。

また、本年は上記社会問題の出題とともに、初回講義時に新聞記事を集めることを宿題として告知し、自分が持ってきた新聞記事の説明、そしてその内容に関する意見をまとめるワークシートを実施した（第五回課題）。

課題の提出に関しては、基本的に授業内および当日中の提出を求めたが、講義時間割の関係（時間割は基本的に固定であるため、常に一日の最後の講義となるクラスが存在する）や、生徒の受講状況や進度状況に合わせ、講義実施日以降の課題提出も認めた。これにより、事情により休んでしまった生徒でも、後から課題を提出することができるとともに、意欲のある生徒は授業外の時間を活用して情報を加えることで、より精度の高い文章を提出することが可能になった。これにより、一部の生徒においては、大学生のレポートと遜色のない内容の課題が提出された。

以下は「講座の報告」ではなく「講師の所感」であるため、「敬体」で記す。

２）講座趣旨

近年の推薦入試の多様化により、入学前準備教育は様々な大学で執り行われております。そのなかで中心となるのは英語であり、数学であるでしょうが、実は「文章表現力」というものも非常に重要となってきております。推薦入試やＡＯ入試では「小論文」という受験科目があり、それらの受験方式で合格してきた生徒は、一般入試の生徒と比べるとその受験を選択してきたという姿勢、あるいはきちんと対策をしてきたという効果が見られ、文章を書くことそのものへの抵抗が薄いというのは事実です。しかし、それらの生徒の文章が「大学での課題」を満足にこなせるだけのものであるとは残念ながらいえません。

その大きな理由は、「長文レポートの未経験」と「客観性の欠如」にあります。

大学によっては、推薦入試に 4000 字にも及ぶレポートを課すところもありますが、一般的な大学においては、受験課目として「試験会場での小論文」というものを中心としております。そこで求められるものは「時間内に（それほど多くない字数を）仕上げる」といういわば、情報処理能力ともいうべきものです。これは一般入試で求められているものと、表面的な形は違えども、内容としてそれほど変わるものではありません（「試験」である以上、これは仕方のないことでもあります）。よって、本講座では（書きなれていない生徒のために字数は最大でも 800 字程度としましたが）、時間に制限を設けず、自分のペースで納得できる文章をまとめることを重視して運営

致しております。

そのような趣旨から、構成がしっかりしている論理的な文章を組み立てるために、授業中に完成させるというスピードを競うのではなく、答案を書く前にメモを取り、構成を組み立ててから書き、そして書き上げた後は答案を読み直して、誤字脱字等の訂正はもちろん、内容が不足していると感じられる部分については、欄外に付け足しを認めるという方法によって文章を完成させることを求めました。

一方で、事前に課題を告知したり、その課題に関する資料を事前に準備したりすることは全員に求めませんでした（生徒が自主的に行うことができる可能性は残しました）。そこまで行ってしまうと、大学で実施する課題レポートと完全に同一のものになってしまうため、入学前という時期を考慮し、生徒への負担を軽減したものです。

「感想文」と「論文」との大きな違いである「客観性」についての配慮は、入学試験における小論文試験においてどれほどの客観性を求められたかということに比例します。一般的な高校生の文章はどうしても「感想文」になりがちであり、高等学校や、塾や予備校での指導はそれを如何にして「論文」にするかということに注力致しますが、すべての受験生がこの体裁を満たしているとは言えず、また、補正が十分になされないまま「大学に合格してしまった」ことによって、自分の文章に変に自信を持ってしまっている生徒がいるのも事実です。大学入学後の講義において、これらを矯正していくことが最初の課題であると推察されますので、この講座においても、「感想文」と「論文」の違いということについては留意して講義、及び添削アドバイスを行いました。

このように、今まで「文章表現」にあまり取り組んでこなかった生徒はもちろん、「文章表現」に対して偏った（しかしそれは決して不正解ではない）考え方をしてきた生徒に対しても、大学入学というこのタイミングで一度「論文（の原型）」に触れるというのは非常に効果的であると考えます。

以上を踏まえまして、この講座のコンセプトは、大学で求められる「論文（レポート）というものがどのようなものであるか」ということを「生徒の進度に合わせて」実体験してもらうということにあります。講師は「合格させる」ための大学受験の指導も行っておりますが、それとは別に高校一、二年生を中心とした生徒に対し、「他人に自分の意志を伝えるとはどのようなものであるか」ということを重点的にトレーニングする講座を多くの高等学校において企画・運営しておりますので、この入学前準備教育講座を、単なる補習的な意味合いではなく、高校から大学への「橋渡し」と位置づけて取り組んでおります。

また、「書き方や構成の説明は全体に、書きあがった答案に対するアドバイスは個別に」というこの形式は、様々なレベルの生徒が受講することになりその運営が難しい小論文講座における受講生の満足度に関しても上々の成果をあげており、これまでの受講後のアンケートでも受講生より高評価をいただきました（自分のペースで書けるのが良かった、欠席したところが心配だったが後からでも追いつけたなど）。

特に、聖学院大学の入学前準備教育に関しては、その設置時期の関係上、高等学校の学校行事などでやむを得ず「欠席」をする生徒がいることもあり、結果的に「全体は 7 日目だが私が来たのは 3 回目という生徒が第 3 講の課題に取り組む」というスタンスが成立するこの講座は、「すべてを個別指導で行うほどの余裕はないが、できるだけ受講生一人ひとりに対応して面倒を見る」という点においてかなり理想的なスタイルであると考えます。

３）受講生の印象

・受講生の気質に関して

まず特筆すべき点として、聖学院大学においては自分の進路に対して前向きな意欲を持つ生徒の割合が、特に推薦入学の生徒に多いということがいえます。聖学院大学が設置している学部・学科が専門性の高いものであるということもありますが、大学として「質の良い」生徒を取るという前向きな姿勢が実りつつあるという、生徒募集における理想的な印象も受けます。

その一方で、「やる気」はあるものの、具体的には何をしたらいいのかわからないという生徒も昨年同様、多く見受けられました。たとえば一般入試を経てきた生徒であれば、「勉強をこれだけやってきた」という一定の達成感を持ちえますが、受験の早い段階で推薦によって合格してしまった生徒は「高校の最後でこれを頑張った」というものがないため、「未来に向けての気持ち」と「何らかの実績」との間に乖離が見られます。

また、これは例年の生徒に見られる傾向ですが、特に一般入試で合格してきた 3 月講座の生徒に、学力以前の段階で「自信を失っている生徒」も見受けられました。特に、今年度は震災の影響で講座が実施できなかった分の代替レポートとして、「自分自身のこれまでを語る」という課題を求めましたが、その求めに応じた生徒の中には、小中学校でいじめの被害者となったり、病気で長期の入院を余儀なくされたりするなど、必ずしも順調とはいえない道のりを経てきた生徒が見受けられました。

同様に、「第 3 希望の大学（聖学院大学）にやっと合格できました」など、受験勉強でも思うような成果が果たせなかった（俗に言う「不本意入学」である）ことを告白してくれた生徒もいました。モチベーションが低い状態で講義を受けても、やはり効果を望むのは難しいため、そのような生徒に対しては何よりも盛り上げる姿勢が最重要課題となります。

聖学院大学に入学してくる生徒は、必ずしも高等学校で好成績を収めていたり、一般入試で第一志望として合格したりした生徒ばかりではありません。これは他の大学でも言えることですが、推薦入試というのは多くの大学が単願・専願にしていることもあり、その大学および学部を「第一志望」で入学してくる、いわば非常に意欲の高い生徒が、一般的な偏差値のランキングにかかわりなく存在します。上記のように、聖学院大学においてもそのような生徒は多数おります。

ところが一般入試で合格してくる生徒のなかには、上記の生徒のように、他大学、あるいは聖学院大学の他学部の受験に失敗して入学してきた生徒というのが一定数います。これは、どの大学においても一定数いると思われますが、高等学校在籍時に「目立たなかった」生徒ほど、自分の進路というものと真剣に向き合う機会が少なかったこともあり（成績・課外活動等にある程度目立つものがなければ、なかなか推薦入試での合格に繋がらないため、このような生徒は最初から推薦入試という手段を選択しない傾向にあります)、大学・学部学科、引いては将来に対して明確なイメージを持たずに入学してきます。

もちろん、そのような生徒は大学生活のなかで、自分の目標を見つけることが多く、また大学とはそのような場でもあるべきですが、ともあれ、入学前というこの段階で、自分の将来に対して非常に高いモチベーションを持っている生徒と、そうではない生徒が教室内に混在しているということは、大いに配慮すべき点であると考えます。

・受講生の文章力に関して

この入学前準備教育は、レベル然り、入学方法然り、非常に様々なタイプの生徒が受講しております。指定校推薦、クリスチャン推薦、ＡＯ入試、公募推薦入試、自己推薦入試、一般入試と非常に多彩な入学試験を展開している聖学院大学は、その受講生の多様さは、偏差値教育で輪切りにされた集団では考えられないほど複雑であり、そして、その多様さは元々様々なレベルに対応していくことが求められる表現力教育においても同様です。

学力的な面で生徒をみると、おそらく一般入試などで求められている「偏差値的な学力」では苦戦する生徒がいるかとは思われますが、論文というものは「１．自分の思っていること」を「２．文章に表わす」という作業であり、１に関しては受験で求められている一般的な学力とは別の地平で図られるものであって、２に関しては高等学校等の授業そのもので（以前よりは重視されているとはいえ）体系的に取り組む機会が少ないために、輪切りにした偏差値で聖学院大学を上回るであろう他の大学の新入生たちとそれほどの差がついていないということは、様々なところで表現力指導を行っている講師の眼から見ても明らかです。

近年の受講生の特徴としては「全く書けないまま固まってしまう」という受講生がほぼ皆無といってもいいほどに減少しており、「何かを伝える」という意志そのものはほぼすべての受講生から感じられました。昨今の「表現力」に対する教育熱、あるいはそれを感じ取った受講生の意識の高さというものはそこかしこに根付いていると思われます。

その反面、ある程度の長さの文章を書くということに対してその経験のなさゆえに、どうしても短文で（400 字以内で）終わってしまう生徒の数が増えています。自分の文章を客観視する能力というものが身に付いていない受講生も多く見受けられました。具体的には、「課題文の要約が出来ていない」「自分の思いだけを繰り返してしまい、結果的に内容が破綻してしまう」「一方的な意見だけを述べてしまい、文章が攻撃的とも取れる」というようなものです。そして、昨年の生徒と比較して、残念ながら今年は特にこのような生徒が多く見られています。

「表現力」というものは、ただ自分の考えだけを一方的に述べるものではなく、その状況に応じて適切な手段を取るべきものであるはずです。このことは、ワークシート課題として実施した講において、欄外までびっしり箇条書きを書いている生徒がいる一方で、それぞれの枠に一言ずつしか記載しない生徒も多数いることでも証明されました。この原因は、文章を書くこと（自分の想いを伝えること）を「面倒くさい」と思って思考停止していることが最も大きいと思いますが、ある程度の説明で相手に伝わると誤解している生徒がいるのも要因の一つであると考えます。このような自分と他者との認識の違いに配慮できない「説明不足」を解消することが、文章力上達の第一歩であり、それはそのまま他者とのコミュニケーション力の向上につながっていくと考えます。

それに加え、いわゆる「話し言葉で書かれている文章」や「一文の構造が破綻している文章」の割合が、ここ数年どんどん増えているということも事実です。これは今年の生徒の答案にも数多く見受けられました。それはすなわち、高校現場で文章を書かせる経験を積ませていたとしても、それはあくまでも「感想」や「作文」でしかなく、客観的な文体で文章を組み立てる「小論文」のトレーニングをしてきた生徒が少なくなっていることを表しているように感じられます。

これらの点については、先述した「思考力のトレーニング」や、講座で設定した小論文課題のなかで、「話し言葉」や「文構造の破綻」についての赤字訂正はもちろんとして、「客観的な文章」というものの表現形式がどのようなものであるかを視覚的に理解させるとともに、意見に関して

も自分の主張だけを述べるのではなく、自分とは違う意見を持つ相手や、あるいは読み手のことを意識することの大切さ、そして自分の意見のほかにも、複数の選択肢があるという視野の広さを身につけることの必要性について、受講しながら実感できるようにしております。

その結果として、自分が取り組んだ課題について、他の受講生の文章を読み、感想を書くという最終課題において、良いところを認め、自分のなかに取り込んでいこうとする成長を見せた受講生が多数見受けられました。

また、問題点に関するアドバイスを受けて書き直した文章の多くは見事に修正され、非常に客観的な構成を用いることができるようになっており、受講生の良い意味での「素直さ」というものにも多数触れることができました。

この入学前準備教育は、単なる補習教育ではなく、従来の「大学合格」という地平ではあまり重視されなかった、しかし大学および社会において必ず求められる問題を、分かり易い形で生徒に提供することを主眼においております。そういう意味では、この講座に前向きに取り組んだ受講生であればあるほど、大学入学後に「自分」という存在を確立させて大きく飛躍できる可能性が大いに期待できます。

４）来年度への提言

講座運営に関しては、微調整は今後も行いますが、基本的にはこのままの形式を踏襲していきたいと考えます。講座スタイルは受講生の満足度によって支えられておりますし、受講生に身に付けてほしい表現のポイントが毎年変わるわけではないので、カリキュラム等の授業趣旨の大幅なリニューアルの必要性は現時点ではありません。

一方で、昨今の受講生の状況を踏まえた細かいブラッシュアップは今後も行っていきたいと考えています。特に「話し言葉」と「書き言葉」の違いを視覚的に意識させるような資料を用意することは必須です。また、自分の考えを伸び伸びと述べることを出発点にしながらも、それをいかに客観的なものにしていくことが大切であるかという視点を重視した課題については、引き続き挑戦していく所存です。そして、3 月講座の代替レポートとして実施したワークシート課題の主眼とした、他人との絆や分かち合いを重視した「共感力」と「行動力」についての意識づけについても、文章指導という枠を超えて挑戦していきたいと考えております。

講師は複数の大学で正規の講義も請け負っておりますので、「大学での授業」や「大学のレポート」に近い形式でのカリキュラムについても、本講座はあくまでも「入学前」ではありますが、大学ではどのようなものが求められるのかということを生徒に理解してもらうことを意識し、今後も工夫しながら行うことで、より「入学前『準備』教育」となるようにしていきたいと考えております。

また、この講座が受講生の自主性を尊重する講座である以上、「どうしても説明を受けないといけない内容」についての「授業内での欠席者フォロー」をしっかりと行い、「多少の欠席がハンデにならない」ように生徒に伝達し、そのことを実感させていくことが大切になっていきます。生徒が「自分の考えを表現すること」に苦手意識を持たないよう、相手に「自分の想いが伝わる」のはとても素晴らしいことであるということを実感してもらうために、今後も努力してまいります。

５）生徒の優秀答案例（第三講　選択課題４　小学校の英語教育必修化）

課題４「小学校の英語教育必修化」（功罪指摘型）

2011 年度から、小学校５、６年生の授業のなかで、６年生終了時点で英語を使って遊んだり自己紹介できたりすることを目的とする「英語活動」が必修化されることを文部科学省が発表しています。こうした小学校での英語教育の必修化には、利点がある一方で問題点も多く指摘されています。その利点と問題点について、具体例をあげて論述し、その問題点を克服するために、これからの英語教育は、どのようなあり方が望ましいと思いますか。600 字以上 800 字以内であなたの考えを述べなさい。

《2 月講座》S.I.さん

2011 年度から、小学校 5、6 年生を対象とした「英語活動」が必修化される。これまで、中学校から取り入れられていた英語の授業が全ての小学校の授業に加わることで、私たちの日本人が英語を学ぶ期間が 2 年間増える。文部科学省が発表したこの英語活動必修化は、世間から多くの反響を呼び話題になった。

英語は世界で最も多くの国で公用語として用いられ、世界共通の言葉といえる。その英語を 11 歳から全ての日本人が学ぶことは、将来に日本社会をさせていく若者にとっては心強い。英語が話せることで就職など活躍の幅も広がる。仕事以外でも、英語を使ってインターネットなどで様々な人とコミュニケーションを取ることが出来るようになり、一人一人の視野も大きくなる。

しかし、反対に英語教育が必修化されることで多くの問題点も浮かび上がる。英語が必修化されることにより他の授業が減ることや、生徒に英語を指導する小学校教諭の負担が増えることも問題の一つだ。また、授業時間や増え、子どもたちの習い事をする時間が減るなど、自由な時間が少なくなることも考えられる。このような問題点が長引くことが、子供たちの英語に対する苦手意識が芽生える可能性につながるのではないか。

英語がつまらないと感じる子供を出さないためにも、小学校教師やネイティブスピーカーが楽しい授業を心がけることが大切だ。教材に工夫をしたりビデオを使った授業をしたりして、子供たちが英語を好きになる学習が今後は必要とされる。

必修化されても、子供たちが学ぶ姿勢を取らないのでは意味がない。小さい年齢のうちから、自ら英語学習に取り組んでいくことで、将来を過ごす上での大きな力になる。英語を進んで学ぶ子供たちが増えることこそが、意味ある英語教育必修化といえる。

《2 月講座》T.A.さん

最近、ニュースなどで来年度から、小学校で「英語活動」が必修化されることが話題になっている。既に文部科学省が発表していて、英語活動の必修化は確実に決定している。六年生修了時点で英語を使って遊んだり、自己紹介できたりすることが目的だ。

小学校での英語活動の必修化には、いくつかの利点がある。まず、小学生という早い段階から英語に本格的に興味を持つことができる。小学生は、英語教育が本格的に始まる中学生よりも様々なものに興味や関心を持ちやすい。中学生から英語を勉強するよりも、楽しく勉強できる。小学生にとって外国人と話が出来るのはとても貴重なことだ。そして、英語に興味がないから中学生までは英語は必要ないと思っている生徒の興味を引きだすこともできるかもしれない。

しかし、問題点もある。英語教育の必修化によって、興味を持てた生徒はよいが、興味を持てずにつまずいてしまう生徒もいるかもしれない。小学生のうちに英語に対しての苦手意識をもってしまうと、中学生からが大変だ。また、周りの生徒との上達の差を気にしてしまう生徒もいるかもしれない。

このような問題点をどのように解決していくかは重要だ。小学生ということを踏まえて、授業の中に、ゲームなどを取り入れて楽しく遊ぶのが良いだろう。日常で良く使うものから学び、簡単なものから徐々に学んでいくことも大切だ。また、教師が複数で指導して生徒一人ひとりに気を配れると良い。

結論として、小学生から英語を学ぶことはたくさんの困難がある。しかし、教師が生徒たちに英語の楽しさを伝えたいと思えば、生徒も英語の楽しさを知り、英語に対して興味を持てるようになるだろう。

《2 月講座》K.O.さん

来年度より、小学校５，６年生が英語を使って遊んだり自己紹介したりできる程度、習得できるような「英語活動」の必修化が決定された。

「英語活動」を小学生のうちに慣れさせることで、まだ頭の柔らかい小学生は早急にたくさんの知識を吸収することができる。そして今後は益々世界進出をする機会が多くなるだろう。インターネットによる世界各地の人々との交信や、海外旅行の増加、留学制度、日本への外国人による留学もある。そのために若いうちから全ての子どもたちが学び得るべき必要知識である。

一方で、子どもたちに有無を言わせず強制的に学ばせるというのは好ましくない。第一、日本における必要最低限の漢字、熟語や言いまわし、敬語などの日本語さえ曖昧なうちから他の言語を習わせるのは母国語および母国の否定につながると思う。子どもたちの混乱も起こしかねない。

やはり、子どもたちには英語を学ばせることも大事ではあるが、自分たちの国の言語を正確に使用できるように指導し、それをふまえた上で英語を学ぶ意義を含め、両方の言語教育に徹するべきである。

世界中の行き来が容易になっている今日、日本にいたとしても英語が欠かせない時代にある。この現状は今後益々盛んになっていくことだろう。それに応じて未来の日本を担ってゆくことになる現在の小学生には幼いうちから徐々にグローバル化の中心にいて慣れていくことが日本をはじめとする世界の繁栄や友好に大いに役立つことである。同時に日本のこともよく知り得て、他国の人々に日本の良い所を教え、日本の良さに気付いてもらえたら、なお良い関係が築ける世界になるのである。世界各国共通の英語というのは、更に重要になっている時代であるということは鮮明である。

《2 月講座》E.Y.さん

２０１１年から小学校高学年の授業に「英語活動」が必修化されることを文部科学省が発表しました。これは６年生終了時点で英語を使って遊んだり自己紹介できたりすることを目的としています。

「英語活動」の利点として、早いうちから英語に触れておくことで知らない国の言葉を話すことの不安感や抵抗感をなくすということがあります。そしてさらに視野を広げ、他の国に興味をもつきっかけにもなります。

一方で「英語活動」の問題点として、今の時間割に新たに「英語活動」の時間を組み込むことにより、他の教科の授業時間が減少するということがあります。ゆとり教育が始まり授業時間が不足した結果、日本人の学力は大幅に低下したといわれています。そこに新たに「英語活動」を加えることにより、今以上に他の教科の授業時間が減少し、学力の低下に繋がる可能性も考えられます。

改善案として、ゆとり教育の開始により無くなった土曜日の登校を再開するという案があります。今でも授業時間の不足を補うために土曜日の登校を実施している学校もあるそうなので、全国での実施も難しいことではないと思います。また、簡単な日常会話などを子ども達が大半理解したら、他の授業でも日常会話は英語でするのもいいと思います。さらには、校内に貼るポスターの文字を英語にしたり、教室の名前が書いてある札の文字を英語にしたりすることもできます。このように「英語活動」以外でも日常生活などで英語と触れ合う環境づくりをすることにより、小学校高学年から始まる「英語活動」がより円滑に進み充実したものになると思います。

「英語活動」は初めて実施されるものなので、実際始めてみたらいくつかの問題点が出てくると思います。しかしそれを一つひとつ改善してよりよいものにしていくことが大切です。

《3 月講座》M.I.さん

２０１１年度から、英語活動が必修化されることを文部科学省が発表しています。以前までは数時間、外国から講師を招き英語教育（ELT）を取り入れている小学校が多少ありました。これは、早い段階から英語になれることを目的としたものです。

そして、英語教育を必修化した場合は今まで取り組んでいた時間より多く英語に触れる機会があるため、子供達にとっては知識がより身につきます。また必修化することによって、皆が平等に早期から英語に触れることができ中学校から英語を学んでいくにあたり抵抗も少なくなると考えます。小学校の時期に好奇心のまま少しずつ英語に慣れ親しんでいくと、問題ともされている「英語嫌い」が減少すると考えます。

しかし英語教育を必修化するにあたり問題点もいくつかあります。必修化するということは、英語という教科の時間が確保されます。その英語が増える分、今までの授業時間に影響が及びます。それにともない「ゆとり教育」が崩壊するのではないかということも懸念されます。また、小学生の頃から英語を必修化することにより、早期の段階で苦手意識を持つ子が出る可能性もあります。

では必修化にあたり、どのように英語教育を進めればよいのでしょうか。まず必修科目にしたため、全員に英語を楽しんでもらえるようカリキュラムを組みます。例えば初めは身の周りものや音楽を聴いて知識ではなく感覚で触れていきます。次に授業時間をしっかり区切ります。他の授業への混合を防ぎ、集中を乱さない為にも各教科に対する区切りを忘れてはいけないと考えます。最後に、英語に自然に取り組ませることを意識することにより、苦手意識が減り子供達の関心が深まります。

このようなことから、英語の必修化をすることで皆が平等に早期の段階から英語に触れることができます。そうすれば中学校への英語の不安も軽減されるでしょう。

4. 小論文実作・添削例

ここでは、課題１と課題５を例として掲載する。
原稿用紙の右の欄が添削欄。右下のローマ字が評価となっている。

(1)　課題１「マナー違反」

■　欧米文化・AO・星槎国際・女

聖学院大学小論文　原稿用紙

教科名	国語	学部名	人文	学部	クラス	[redacted]
第[1]講		学科名	欧米文化	学科	氏名	

タイトル　マナー違反

最近、マナー違反を犯す人が増えていることが社会問題になっている。例えば、電車内で携帯電話を使用する人もしくはマナーモードに設定しない人、人前で化粧をする人などをよく見かける。電車内での通話や着信音は声や音が迷惑になるし、人前に出るときのための化粧なのにその人前でするなど化粧をする意味がない。こういったマナー違反はなぜ起こるのか。その原因はマナー違反者の意識にあるのではないだろうか。「自分さえ良ければいい」「他人がどう感じようと関係ない」という自己中心的な考えを持っている。だから周囲の迷惑を考えずにマナー違反を犯してしまうのではないだろうか。

こういったマナー違反をなくすには、地道な努力が必要だ。マナーに関する広告、マナー違反を予防するための看板やアナウンス、家族や友人によるしつけや注意。一度に全てが解決する問題ではないが、少しずつでも減らすことはできるはずだ。

社会で生きていくということは人に囲まれて、人と人の間で生きていくということだ。社会の中では他人の目を意識することは免れない。そういう場所に身を置くのだから、最低限のマナーは守るべきだ。自分が身内だけの世界ならまだしも、社会で生きていく以上は周囲の目、周囲の迷惑を考えていかなくてはならない。

構成メモが書かれていてgood!

マナー違反の現状が書かれていてgood!

背景の中に隠れている原因をつくっている人の思い(自己中心的)があげられていてgood!

解決するためのキーワードになるものが書かれていてgood!

そうですね!周りの人を大切にすることも気がかえるような人になるといいですね。

しっかりと電車内の背景にマナー違反をする人の思いを挙げたり、その人達の行動がどういった影響を与えているのかくわしく書かれていてとてもいいです。

字がきれいで見やすかったです。Very good!

◎コメント

全体的にまとめられていていいと思います。構成メモもgood.
マナーをするにあたって、どういう人が行うのか、どういう人が困ってしまうのかを考えることもできますね。小さなことから考えることもできます。頑張って下さい。[redacted]

評価　A B C D
Good

(2) 課題 5「若者に必要な能力」

■ 児童・AO・正智深谷・男

聖学院大学小論文　原稿用紙

教科名	国語	学部名	人間福祉	学部	クラス	[redacted]
第[5]講		学科名	児童	学科	氏名	

タイトル 若者に必要な能力

最近の若者は、あまりモノを考えていないのか、自分の意見を言わないし、わからないことがあっても口をつぐむ。これでは他者とコミュニケーションができないし、自分を高められるはずもない。また、最近は少子化で大学に簡単に入れるようになり、考える力が付くどころか、肝心の基礎学力が低下する心配もある。また、モノを考えないと、学力もえしい「学士」は競争がないに等しい。

課題文では、このように書かれているが、私はこのようなことに賛成である。

モノを考えるなどの「若者に必要な能力」が身についていない原因は、自分が意見を言わなくても他の人が言ってくれ、その意見に賛成すれば大丈夫と考えている人や、携帯電話などがあるために、人とコミュニケーションを取らなくても大丈夫を考えている人が多いからである。また、意見を考えるのがめんどくさいと考え、自分の意見を考えない人が多いのもその原因の1つだと考える。

「若者に必要な能力」を身につけるための方法は、自分の意見を持つことが大切だと考え、人とのコミュニケーションをする場をたくさん持ち、たくさんの人の意見を聞くことによって自分で考え自分の意見を考えることができるようになりモノを考えることができるようになり、コミュニケーションもたくさんできるようになるのではないかと考える。

このことにより、モノを考えるなどの「若者に必要な能力」は身につけなければならない能力なのである。

要約がしっかりできています。
大切な所が掴めていますよ！

そうですね。
他者に頼りすぎるようになってしまいましたね

機械の発達で、機械を通したコミュニケーションばかりになって面と向かったコミュニケーション不足になっていますよね。

自分の意見を言わなければならない場を設けることはとても良いと思います！

◎コメント

バランスが良いと思います。
原因や、改善策が分かりやすく[redacted]の意見がきちんと見えていて、とても良かったです。
1ヶ月お疲れ様でした！[redacted]

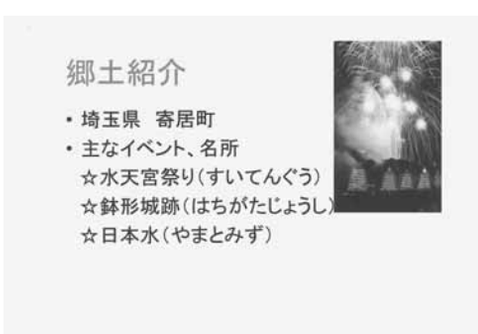
評価　A B C D

Good

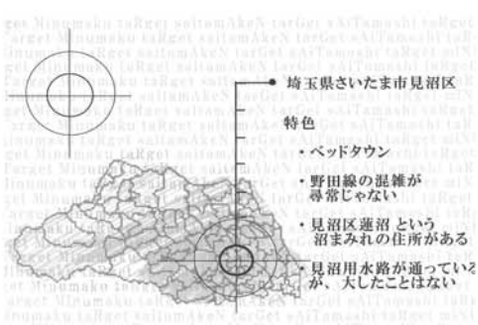
5. プレゼンテーション例

2月講座では、プレゼンテーションとしてOHPを利用し、自己紹介を行った。以下に作例を掲載。発表者氏名、高校等、個人情報に関わる部分はマスキングをしている。
（■以降は、学科、試験、性別）

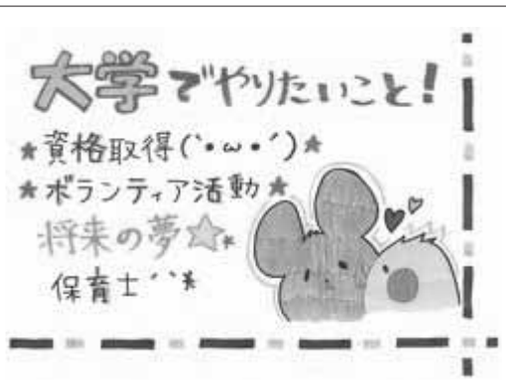
■ 政治経済・AO・男



■ 日本文化・AO・女



■　児童学科・推薦・女



■　人間福祉・AO・女

6. 事務局より（震災対応報告等）

1. 震災対応について

（1）3 月 11 日・12 日

東日本大震災発生が発生した 3 月 11 日は、ちょうど、3 月講座 5 日目でした。地震の発生した 14:46 は、授業が終わって 15 分程度経っており、約半分の受講生は大学を出ていました。そもそも 3 月講座は高校の卒業式やその準備でやむをえず欠席する受講生が多く、この日も、71 名中、約 40 名程度の出席でした。

地震が発生し、残っていた受講生と学生スタッフは、グラウンドに退避、17 時頃まで大学で待機していましたが、スタッフを含め解散することにしました。しかし、ＪＲが動かないという状況を踏まえ、事務局スタッフは、最寄駅宮原、日進、西大宮駅で、電車を待つ受講生を迎えに行きました。結局大学に戻ってきたのは、受講生 14 名。その晩 4 号館 1 Ｆで、学生スタッフ 2 名および、その他大学にいて、帰宅が難しくなった学生たちと共に、宿泊することになりました。大学側で、パンやおにぎりなどの食事を用意しました。

一方 14 名以外の、その日出席した受講生たちの安否を確認するため、職員が、自宅に電話をかけ、まだ帰宅していない場合には翌日大学に電話をしていただきたい旨を伝言しました。（結局、翌日までにほぼ全員の安否の確認は取れました）。

翌日、遠距離等の理由で、家族の迎えがない学生たちがいましたが、上り方面では大宮駅からのＪＲおよびニューシャトルが動いていることを確認したため、東宮原までスクールバスを出して帰宅、下り方面は動き出したＪＲで帰宅することになりました。

（2）3 月講座の後半授業の対応について

11 日の後の授業は、15 日、16 日と続く予定でしたが、余震や停電などの影響で、通学に心配があるため、受講生の自宅に電話をかけ、中止連絡をし、後半の授業は、実施予定だった課題を郵送、添削をすることにしました。また、追加の課題を、各教科の講師に作成依頼をし、こちらも受講生に郵送、随時添削を行っています。講師には、いつも講座終了時に行っていた、クロージングでの受講生に向けての話をしていただくよう、依頼、職員が録画・You tube で配信しました。

また、課題とは別に、学生スタッフから、受講生向けのワールド・カフェの提案があり、「震災で私たちは何ができるか」を受講生に案内、部活動が解禁となった 4 月 18 日に希望者が集まり行いました（P27 参照）。終了時に、先ほどの講師のメッセージ録画を受講生に見せています。

2. 学生スタッフの教育について

昨年初めて、3 月のスペシャルプログラムとして、「ワールド・カフェ」に近い「カフェ・トーク」という企画を実施。その際の学生スタッフの反省として、“ワールド・カフェの経験がほとんどないため、運営スタッフとして受講生をうまく盛り上げることができなかった”という意見が多くでました。そして、学生スタッフ自ら、“来年度成功させるために、1 年かけてじっくりスタッフが体験しよう”という意見が出たため、職員も応援することにしました。

具体的には、5 月、11 月と、外部者にも公開し、「ワールド・カフェ」を開催、8 月には高校生向けに大学広報課が企画するサマースクールというイベントのプログラムとして、「ワールド・カフェ」を開催しました。また、イベント準備のために、外部講師を招いての勉強会、また外部で行われる「ワールド・カフェ」やその勉強会に、職員をはじめ、学生スタッフが参加して、経験の回数を増やしました。これらのイベントの準備のために、学生スタッフ同士の連携が深まり、「ワールド・カフェ」だけでなく、来る入学前準備教育実施のためのモチベーションが高まることになりました。実際、2 月・3 月の初日に 1 時間かけて行う、受講生同士の“自己紹介”の企画は、学生スタッフの積極的な取り組みで受講生が盛り上がり、友だちづくりに一役買うだけではなく、その後の授業の雰囲気がとてもよくなりました。

また添削についても、サマースクール 7 月、8 月、9 月と実施した、1 日小論文講座で、上記学生スタッフが、講師や、毎年添削経験をする先輩スタッフの指導のもと、添削の経験を積みました。これらの経験は、2 月・3 月の入学前準備教育での添削の準備ともなりました。

昨年までは、入学前準備教育の学生スタッフは、実施する 2 か月前に応募していましたが、上記のように 1 年間、さまざまな研修や、コミュニケーションをとることによって、従来の入学前準備教育のスタッフチームの雰囲気が格段によくなり、講座の運営も円滑になりました。また「ワールド・カフェ」や「小論文の添削」に共通している、“よいところを見つけて、ほめる”という行為を学生自身が、自然に心がけることになったとも思います。来年度もこれらを実施したいと思います。

以　上

参考資料

入学前準備教育

英語集中講座報告

掲載記事

2010年度英語集中講座報告

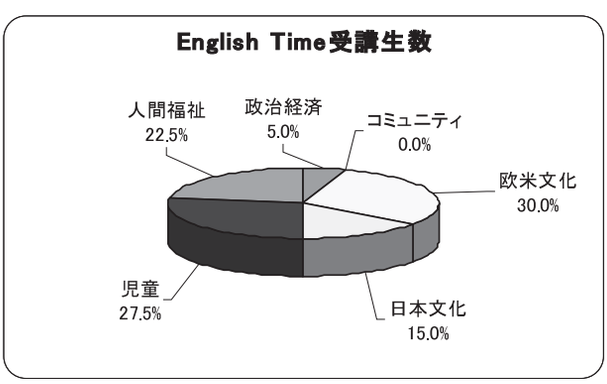
聖学院は「面倒見の良い大学」「自分自身を向上させる大学」「英語が好きになる大学」を目標としています。その教育の一環として、新入生を対象とした、入学後の英語授業の事前準備教育として、5日間の特別英語集中講座を開設しました。

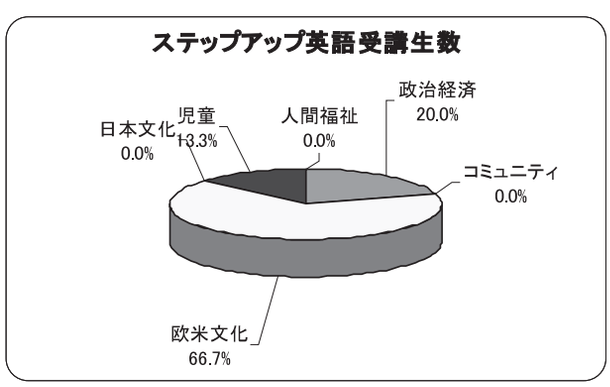
「ベーシック・イングリッシュ」講座では、英語ネイティブ講師によるコミュニケーションを重視した授業を実施しました。受講生は、ペアワークにより様々な場面での英語を話す機会を得、リスニング、スピーキングの練習、英語を学ぶ楽しさを経験しました。「ステップアップ英語」講座は、特に文法と試験スキルの向上を望む受講生のための講座で、バイリンガル講師により、1日に90分授業が3コマ行われました。受講生が認定基準を満たした場合、入学後に履修可能の「Test English A」の単位を取得できるようになっています。

今年も昨年に引続き、受講生の出席率は非常に良く、全講座のアンケート結果では、講座内容が受講生の期待に沿ったもので、聖学院大学入学後の準備に大変役に立ったとの高い評価を受けました。

学科別受講者数（全講座）55名

ベーシック・イングリッシュ	40名
ステップアップ英語	15名





A. Basic English / English Time　「ベーシック英語 / イングリッシュタイム」

講師：メヘラン・サベット

1. 講座概要

このクラスは、４月から聖学院大学で勉強をする英語のクラスに慣れ親しむことを目的としています。講座では、サンプル・レッスンをもとに、アクティビティーを取り入れて、課題に取り組みます。

１日目：「クラスメイトを知ろう！」コミュニケーション方法
Session 1:　Get to know everyone better. Communication strategies

２日目：「サバイバル英語」　海外旅行で必要最低限の英語を学ぶ
Session 2:　Survival English. Survival skills while traveling abroad

３日目：「English through Songs」　英語でアーティストや歌について学ぶ
Session 3:　English through Songs. Learn about artists and songs using English

４日目：「シネマ英語」　映画を見ながら英語を上達させる
Session 4:　Cinema English. Improve your English by watching movies

５日目：「自然にコミュニケーション」友達やクラスメイトと英語を楽しく話す
Session 5:　Communicate naturally: Enjoy speaking English with friends and classmates

2. 講座スケジュール

A.　ベーシック・イングリッシュ　English Time　講師：メヘラン・サベット

Day 1：2 月 24 日（木）

時限	時間	教室
オリエンテーション	9:45～10:00	4303 教室
1 時限	10:00～11:00	4303 教室
2 時限	11:10～12:10	4303 教室

Day 2：　2 月 25 日（金）

時限	時間	教室
1 時限	10:00～11:00	4303 教室
2 時限	11:10～12:10	4303 教室

Day 3：2 月 28 日（月）

時限	時間	教室
1 時限	10:00～11:00	4303 教室
2 時限	11:10～12:10	4303 教室

Day 4：3 月 1 日（火）

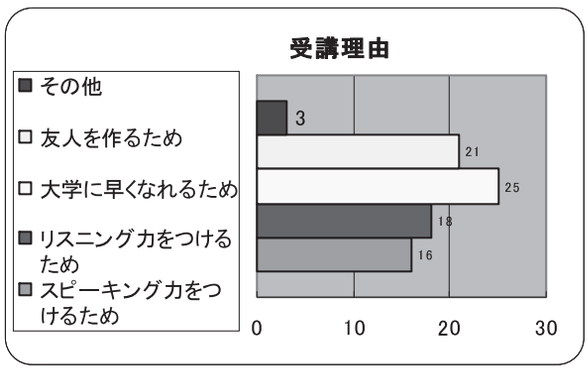
時限	時間	教室
1 時限	10:00～11:00	1305 教室
2 時限	11:10～12:10	1305 教室

Day 5：3 月 2 日（水）

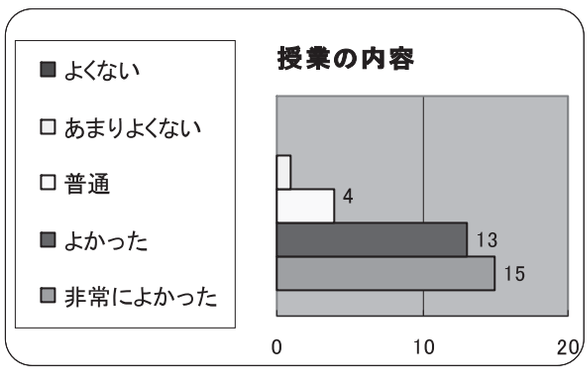
時限	時間	教室
1 時限	10:00～11:00	4303 教室
2 時限	11:10～12:10	4303 教室
閉講式	12:10～12:30	4303 教室

3. アンケート結果

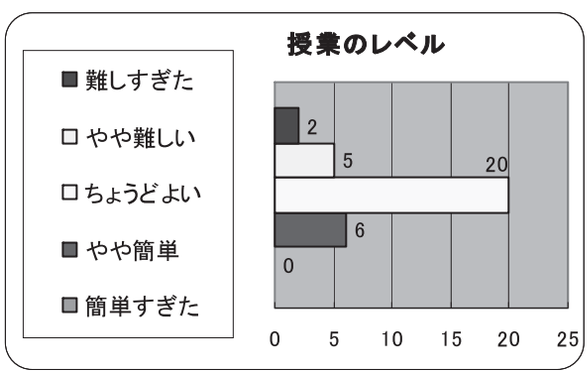
1. 英語集中講座を受講した理由は何ですか？



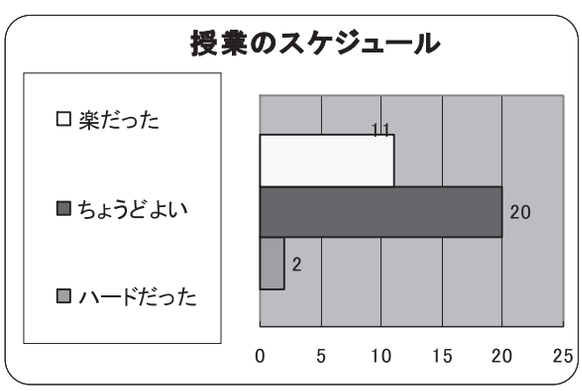
2. 授業の内容はどうでしたか？



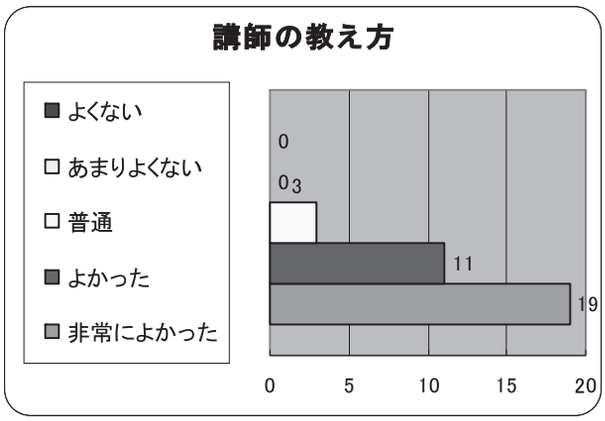
3. 授業のレベルはどうでしたか？



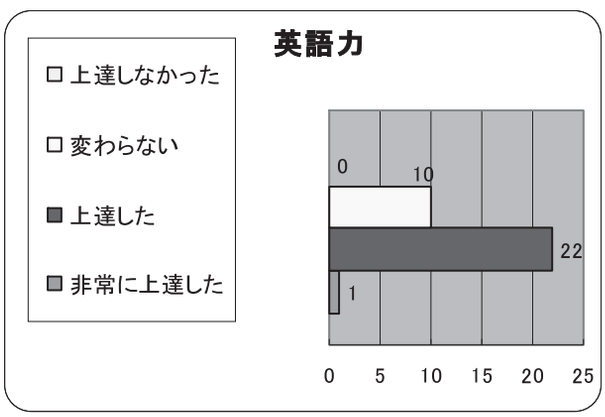
4. 授業のスケジュールは高校の授業に比べてどうでしたか？



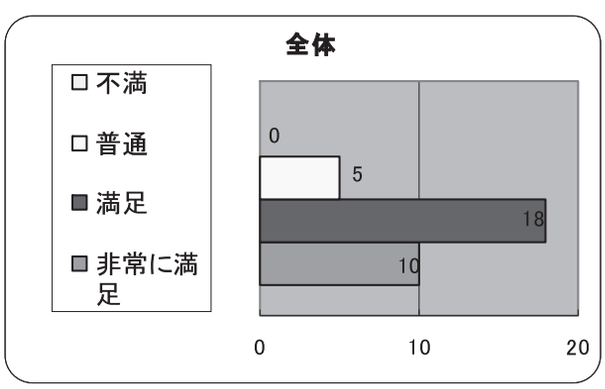
5.　講師の教え方はどうでしたか？



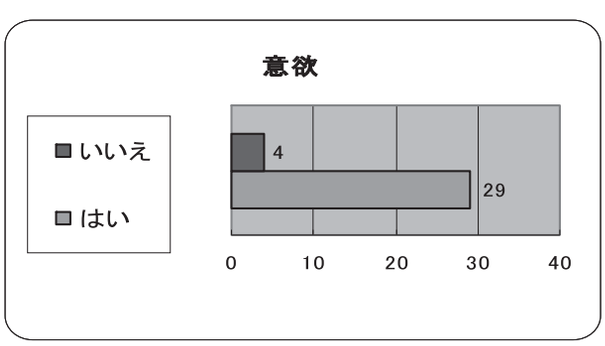
6.　英語力は上達しましたか？



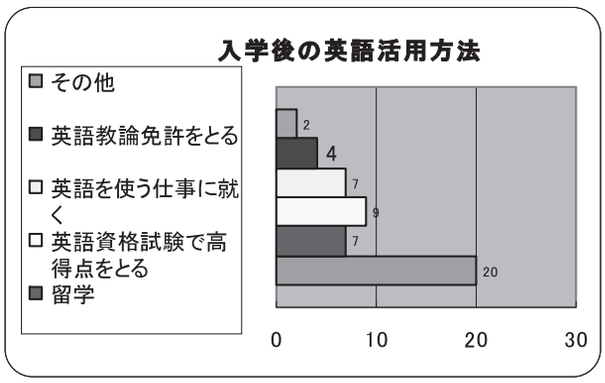
7.　講座は全体をとおしてどうでしたか？



8.　英語を勉強する意欲は増しましたか？



9.　入学後、英語を使ってどうしたいですか？



10. 自由意見

・　英語が苦手だったのでこの講座を受けて良かったです。
・　この講座を受講する前、友達が出来るか、違った人とコミュニケーションが取れるかが不安でしたが、自ら話しに行ったり、話しかけられたりして、少しずつ友達が出来ました。
・　初めは不安でしたが、先生も優しくて面白くて本当に楽しく英語が勉強できました。ペアを組んだことで友達もできたし、この講座を受けてよかったです。
・　今まで英語の授業では簡単だったので、短期間授業を受けただけで上手くなり驚きました。

B. Step Up English　「ステップアップ英語」

講師：　島田　洋子

1.　講座概要

リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングに役立つ基礎文法力アップの講座です。

資格試験でスコアをアップしたい、または英語の 4 技能をもっとフルに活用したいと思っている人のために、短期間で集中して文法の見直しが出来る講座を用意しました。この講座は文法の説明だけでなく、短い会話を含めた口頭練習を取り混ぜて、より英語らしい英文の表現が出来るように、総合的な英語力アップを目指します。欧米文化学科で「英語強化プログラム」に参加したい人や、留学・資格試験の受検を考えている人には特にお勧めです。

１日目：　よく間違える be 動詞と一般動詞の違い、現在時制と現在進行形の違い

２日目：　未来時制と過去時制を使って自分や周りの人について表現しよう

３日目：　完了形っていつ使うの？微妙な気持ちを表す助動詞の使い方

４日目：　会話に役立つ疑問文や否定文の作り方、受動態の見直し

５日目：　資格英語テストに良く出る不定詞と動名詞の違い、奥の深い動詞の使い方、まとめ

2.　講座スケジュール

B. ステップアップ英語　Step Up English　　講師：島田　洋子

Day 1：2 月 24 日（木）

時限	時間	教室
オリエンテーション	8:45～9:00	4202 教室
1 時限	9:00～10:30	4202 教室
2 時限	10:40～12:10	4202 教室
各自昼食	12:10～13:00	
3 時限	13:00～14:30	4202 教室

Day 2：　2 月 25 日（金）

時限	時間	教室
1 時限	9:00～10:30	4202 教室
2 時限	10:40～12:10	4202 教室
各自昼食	12:10～13:00	
3 時限	13:00～14:30	4202 教室

Day 3：2 月 28 日（月）

時限	時間	教室
1 時限	9:00～10:30	4202 教室
2 時限	10:40～12:10	4202 教室
各自昼食	12:10～13:00	
3 時限	13:00～14:30	4202 教室

Day 4：3 月 1 日（火）

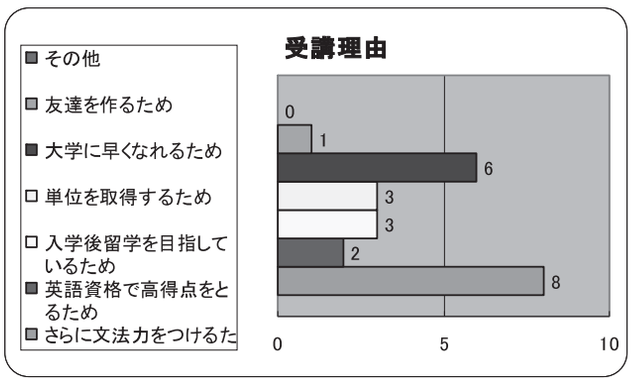
時限	時間	教室
1 時限	9:00～10:30	4202 教室
2 時限	10:40～12:10	4202 教室
各自昼食	12:10～13:00	
3 時限	13:00～14:30	4202 教室

Day 5：3 月 2 日（水）

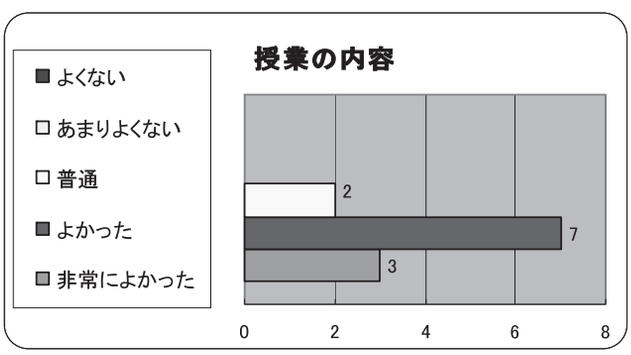
時限	時間	教室
1 時限	9:00～10:30	4202 教室
2 時限	10:40～12:10	4202 教室
各自昼食	12:10～13:00	
3 時限	13:00～14:30	4202 教室
閉校式	14:30～14:50	4202 教室

1. アンケート結果（Step Up English　ステップアップ英語）

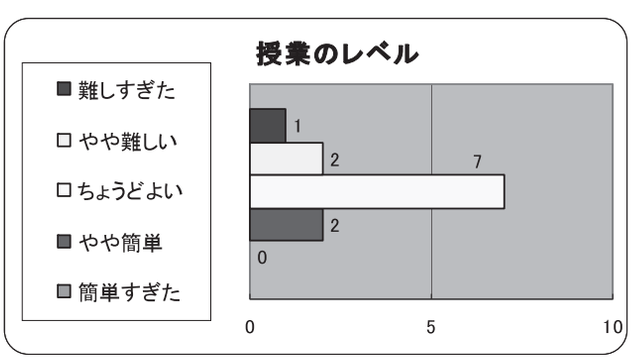
1. ステップアップ英語を受講した理由は何ですか？（複数回答可）



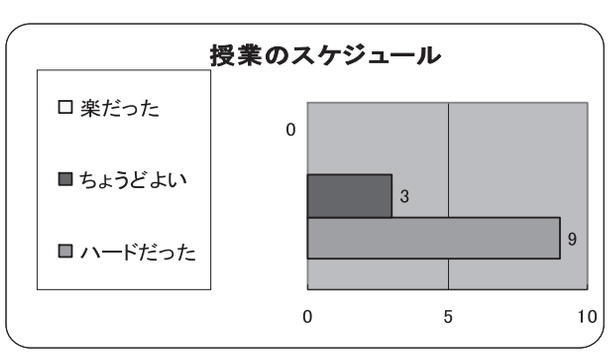
2. 授業の内容はどうでしたか？



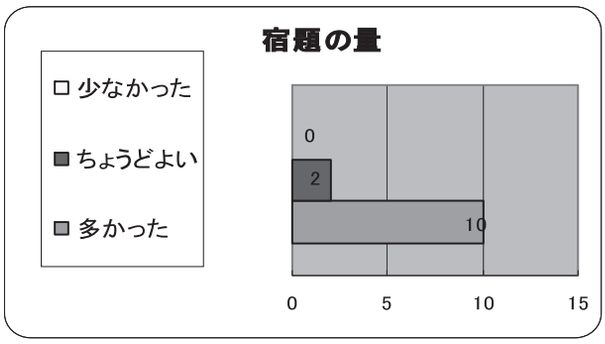
3. 授業のレベルはあなたにあっていましたか？



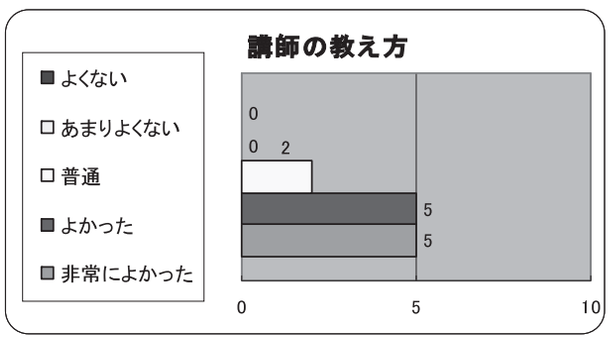
4. 授業のスケジュールは、高校の授業に比べてどうでしたか？



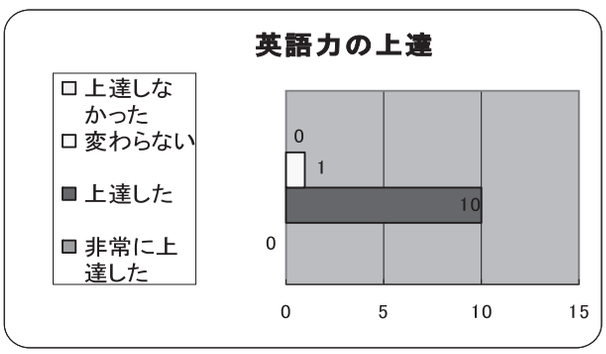
5. 宿題はどうでしたか？



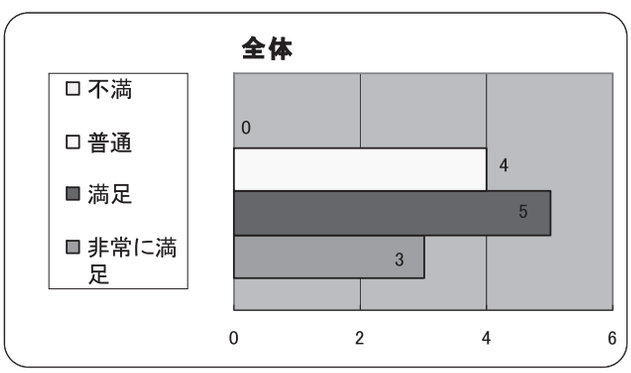
6. 講師の教え方はどうでしたか？



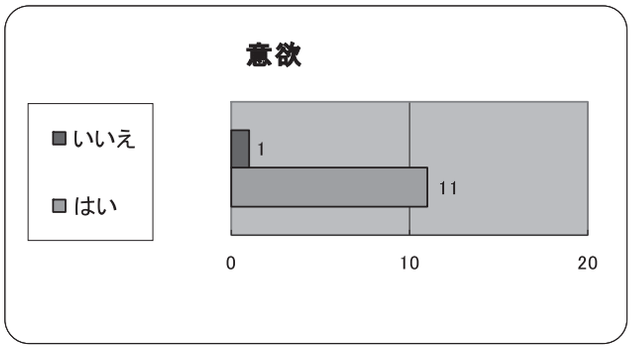
7. 英語は上達しましたか？



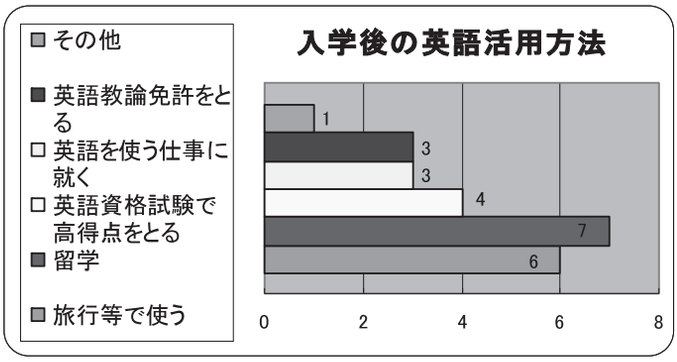
8. 講座は全体をとおしてどうでしたか？



9. 英語を勉強する意欲は増しましたか？



10. 入学後、英語を使ってどうしたいですか？



11. 自由意見

- 先生の教え方がわかりやすく、英文法の復習がしっかりできました。
- この講座を通して基礎・基本の英文法を学び直せたと思います。
- 5 日間、とてもやりがいのある講座でした。楽しかったです。大変でしたが、その分身に付いたものが大きいと感じました。
- 大学は甘くないとあらためて痛感しました。
- 2 日間休んでしまいましたが、基礎英語の復習にもなりとても良かったです。基礎のわからないところが分かったことでこれからもっと成長していく上で、とても役に立ちました。

※P.61 では、朝日新聞（2010 年 9 月 9 日）、本学の入学前準備教育を掲載された記事を掲載しました。web では、二次転載を控えさせていただきます。